

宮城県肢体不自由児者父母の会連合会

会報 **こころ** 第70号

発行責任者：宮城県肢体不自由児者父母の会連合会 会長 永井 一男
〒983-0836 仙台市宮城野区幸町4丁目6-2
(財)宮城県障がい者福祉協会内
電話：022-293-2902 F A X：022-291-1588
ホームページ：http://miyagikenshiren.web.fc2.com



全国肢体不自由児者父母の会連合会 第54回全国大会 関東甲信越肢体不自由児者父母の会連合会 第58回東京大会

日 時：令和3年9月18日（土）

会 場：大田区産業プラザP i O（視聴参加と来場参加の併用）

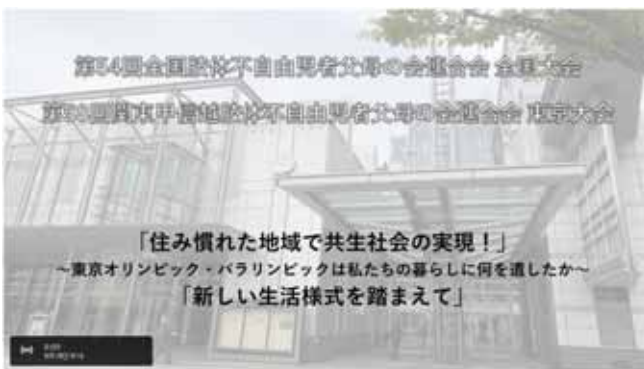
大会テーマ：住み慣れた地域で共生社会の実現

～東京オリンピック・パラリンピックは私たちの暮らしに何を遺したか～
新しい生活様式を踏まえて

全国肢体不自由児者父母の会連合会第54回全国大会兼関東甲信越肢体不自由児者父母の会連合会第58回東京大会は、新型コロナウイルス感染症拡大を考慮し、WEBオンラインでの視聴参加と会場参

WEBオンライン参加者へは9月10日に視聴用URLが電子メールで通知されました。試しに事前に視聴用URLにアクセスしてみたところ、9月18日の午前9時10分から配信されるとの情報と、背景には大会会場の外観と大会テーマが表示されていました。

大会会場は大田区産業プラザP i Oの大展示ホールが予定されていましたが、大展示ホールは大田区の新型コロナウイルスワクチン大規模接種会場となったため、3階の特別会議室がメイン会場に変更となり、ここからYouTubeでオンライ



加のハイブリッド形式で開催され、宮城県からはWEBオンラインで参加しました。会場とオンラインを合わせ500名を超える参加者となったそうです。

大会テーマは「住み慣れた地域で共生社会の実現！～東京オリンピック・パラリンピックは私たちの暮らしに何を遺したか～」「新しい生活様式を踏まえて」でした。



ン配信されました。

岩田理加子さん（障害のある息子さんがいたようだが2年前に死亡したとのこと）の司会進行で行われ、9時30分からは開会式。開会セレモニー、主催者挨拶、来賓祝辞、表彰他が執り行われました。祝辞代読者や表彰対象者の所属・氏名が画面に表示されたので、たいへんわかりやすく感じましたが、それと同時に全肢連結成60周年記念表彰に宮城県からは一人も該当者がなかったのは寂しく感じました。



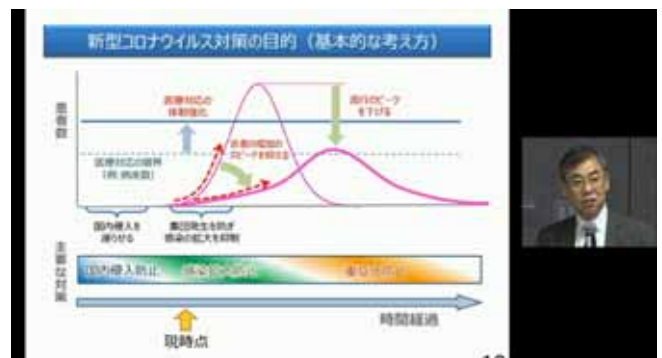
11:00から野田聖子氏（全肢連顧問、衆議院議員）の記念講演（自身のお子さんの事例を取り上げ「障害のあるお子さまの育成、医療的ケア児支援法について」）が行われました。

昼食休憩を挟んで12:45からはオリンピック組織委員会の山口祥代氏と吉田茜氏から「オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の取組」と題した基調講演が行われました。オリパラ全体を通じてのパラ関連の取り組みをコロナ対策中心に話がありました。



13:20からは『東京オリンピック・パラリンピックから私たちは何を引き継ぐか』をテーマとしたシンポジウムが行われました。尾上浩二氏がコーディネーターを務め、東京都肢体不自由特別支援学校校長会会長の高橋馨氏、元パラリンピック日本代表の横沢高德氏（岩手県選出の参議院議員）、中央大学研究開発機構の稲垣具志氏の3氏がシンポジストでした。

15:00からは2つ目の記念講演「障害者に対応するポストコロナ時代をどうのぞむか！～ワクチン接種の現状と今後の障害者対策～」と題して、現在のワクチン



ン接種状況と新型コロナウイルス感染症に用いられている治療薬、医療体制等について、樽見英樹厚生労働事務次官から話がありました。

16:00からは閉会式が行われ、16:30には予定通り一切の行事が終了しました。植松副会長の閉会の挨拶はZOOMで行われました。

閉会式の中では大会決議文が朗読され、異議なく採択されました。

オンライン参加では他の参加者のチャット書き込みを見ることができ、私は会場参加よりいいなと感じました。

大会決議文

全肢連は身体に障害がある子ども達の療育・教育・在宅での支援など障害児福祉の在り方を求め、初代会長高木憲次博士を中心に昭和36年11月に創立以来60年を迎え今日に至りました。

本大会では全肢連顧問の衆議院議員「野田聖子先生」の記念講演で、医療的ケアや重い障害があっても、私たち自身の愛情と行動が明日に向かう希望に満ちた障害福祉の「明るい道標」を示していただくことができました。

しかし、一昨年12月中国武漢から世界中に蔓延した新型コロナウイルス感染症は、私たち、障害児者・保護者の活動にも大きな制約が課せられ「障害のある人もない人も共に暮らす共生社会の構築」に影響を及ぼし完全終息の見通しが立たない現状にあって、一人ひとりがコロナ感染予防対策に取り組むことの大切さと、新しい生活様式の定着で国民待望の「東京2020オリンピック・パラリンピック大会」を7月に開催することができました。

第2回パラリンピックが東京で開催されてから50年以上が経ち再び東京でオリンピック・パラリンピックが開催を契機に社会環境はハード面のバリアフリーが整備され心のバリアフリーの推進に資するよう様々な取り組みがありました。

障害者権利条約の批准に伴い障害児者にかかわる法律が整備されましたが、社会での理解は十分とはいえ地域による格差も依然として存在しています。

どのような環境にあっても障害のある子どもたちが学び、スポーツや芸術に親し

み、地域で安心して暮らしていくために第54回全国肢体不自由児者父母の会連合会全国大会、第58回関東甲信越肢体不自由児者父母の会連合会東京大会の名において次の事項を決議します。

- 一．障害児者及び保護者・支援者の新型コロナウイルス感染症対策を進めること
- 一．施設や交通のバリアフリー化を一層進めること
- 一．どこにいても、適切な療育と医療が受けられること
- 一．医療的ケアや重い障害があっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための必要な支援を充実させること
- 一．障害や障害児者への偏見がなくなるよう、なお一層の啓発に努めること

令和3年9月18日

第54回全国肢体不自由児者父母の会連合会全国大会

第58回関東甲信越肢体不自由児者父母の会連合会東京大会

(松田廣勝記)



東北ブロック指導者育成セミナー

日 時：令和3年12月18日(土)・19日(日)

会 場：エスポート宮城（宮城県青年会館）

テーマ：居宅・GHの訪問サービスと障害者の住まい

財団法人JKA（競輪公益補助事業）の令和3年度地域指導者育成セミナーは、宮城県肢体不自由児者父母会連合会の担当で、令和3年12月18日(土)と19日(日)の2日間にわたりエスポート宮城（宮城県青年会館）で開催されました。

障害者福祉は、施設から希望する地域で生活できる体制が進められてきましたが、重度障害者や医療的ケアを必要とする人が利用できるグループホームや、安心して生活できる住まいの整備は進んでいません。

「施設から地域へ」とは程遠い現状から「居宅・グループホームで生活する障害者の福祉サービス及び住まいの向上につなげる」ことがセミナーのテーマとなりました。

当初、全肢連からの開催依頼に対して、宮城県肢連として「コロナ禍が一向に収まる気配がなく、対面でのセミナーは難しいのではないかと、昨年に引き続き中止したい旨を伝えました。しかし、全肢連は「今年には是非開催したい。コロナ禍の推移を見ながら、場合によっては年を越してでも日程と場所を確保してほしい」との要請もあり、年末ギリギリの日程となりました。幸い12月に入り、コロナ感染症はワクチン接種が進んだこともあって第5波から脱却し、全国的に落ち着いた状況での開催となりました。

開催当日は悪天候のため、自家用車で来仙した秋田県と青森県からの参加者が開会時間に間に合わなかったほか、講師の大垣勲男氏も北海道からの便が遅れるなどありましたが、全肢連と東北各県から19人が参加して開催しました。

1日目は、午後1時から、清水誠一全肢

連会長と宮城県肢連を代表して永井一男があいさつして開会しました。続いて、今回特別参加していただいた宮城県障がい者福祉協会の森正義会長を紹介し、挨拶していただきました。



この後、コカ・コーラの佐藤正宏氏から福祉支援自動販売機についての現況報告と自販機設置促進の協力依頼がありました。

「重度障害者（医療的ケア）のGHのあり方と運営の課題」

～ハード・ソフト面で高負担～

「伊達コスモス21」理事長 大垣勲男氏

「重度障害者、医療的ケアのある方のGH等住まいの有り方と運営の課題」について、北海道・伊達市の「(社会福祉法人)伊達コスモス21」で理事長を務める大垣勲男氏は、数カ所のGHを運営している立場から、GH設立の経過や暮らしの様子等を話されました。その上で、課題や改善点など次のように指摘されました。



GH設立の課題は、①車いすや送迎用車両スペース等の確保のため、広い土地の確保が必要で、その取得費用が高負担となる。②廊下、居室、トイレ、浴室、玄関などいたるところにバリアが存在する。したがって、設備整備などを含む建設費は膨大で、国からの補助は不十分だ。これらの課題改善にはバリアフリー加算を創設すべきだ。

運営上の課題は、①重度障害の利用者がいるGHでは、世話人や生活支援員は国の報酬基準では運営できない。②医療的ケアは、訪問看護原則週3日となっていて、GHの看護師の負担が大きすぎる。したがって、①現実的でない世話人や支援員の配置基準の見直しを図るべきだ。②医療的ケアを十分できるよう、複数の看護師確保できる報酬改定をすべきだ。と提言した上で、「職員はギリギリの状態、時には奉仕さえ求められている。日本はそんなに貧しい国ではないはずだ。利用者像を整理した制度設計を私たち現場から発信しよう。」と訴えました。

「住み慣れた地域で安心安全に生活できる障害福祉制度の確立」に向け調査開始

全肢連会長 清水誠一氏

全肢連清水誠一会長は、「障害者福祉サービス(重度訪問介護等)利用計画の実態と共同生活援助(GH)のあり方」と題し、次のように話されました。

令和3年4月から「第6期障害福祉計画」が策定され、「障害福祉サービス等の報酬改定」があった。それを基に、国に準じた「障害福祉計画」を各都道府県・各市区町村が策定する。障害福祉サービスの報酬は、国が定める国庫負担基準に上限があり、超えると市区町村の負担となる。そのため、市区町村の福祉サービス支援内容や支援時間などで地域差が出ている。医療的ケアを必要とする方々からの調査では、①支援計画に比べ実際の支援時間が短く、サービスの回数も少ない。②土・日・祭日など週末に重度訪問サービスが利用できない。③生活介護事業所やGHでは、医療的ケアを利用できるところが少ない。などが指摘された。

また、在宅で生活している58%の人からは「将来希望する住まい」として、グループホーム、入所施設など在宅生活から自立生活を望むと回答があった。しかし、医療的ケアを必要となる人など重度障害者の住まいは、「施設から希望する地域で暮らす真の共生社会」の実現には程遠いと言わざるを得ない。

グループホームの建設には、定員4人～10人の場合の建築費国庫補助は2,49



0万円である。特殊浴槽等備品費を含めた建設費総額は、最低でも1億円程度となる。そのため重度障害者対応のGHは進んでいない。今後は、国の補助制度の引き上げと共に自治体の助成制度が求められる。



一方、事業運営者から見たソフト面では、慢性的な人材不足や医療的ケアに対応する職員、GH世話人、支援員の配置基準と報酬単価が現実的でない。人員配置基準や報酬単価の見直しが必要だ。などの指摘がありました。

その上で、全肢連では「住み慣れた地域で安心安全に生活できる障害福祉制度の確立」を目指し、来年度に各父母の会や事業運営に携わっている人から、直接意見を聞くなど調査に着手したいと述べました。

2日目は、3班に分かれ、1日目の講演を基に「住まいの現状や課題、望む支援」などについてのワークショップを行いました。最後に各班のまとめを代表者が発表し、2日間のセミナーが閉会しました。

(永井一男記)

会員だより

コロナ禍で

青砥 信吾

もう2年以上も新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、随分我慢していることがあります。春はお花見、夏は納涼会、秋は紅葉狩りなどどこにも行けなくなってしまいました。ウインドウショッピングも楽しみの1つでしたが、それもダメです。趣味で囲碁をしています、前は幸町市民センターで町内会の人達と混じって一緒にしていましたが、今は啓生園の人達とだけなのでもっと色々な人達とやりたいです。

もうお花見は2年もしていません。外に出てマスクを外して飲んだり食べたり、お話ししたり自由に羽を伸ばしたいです。ボーリングもしたいです。みんなと旅行にも行きたいです。早く自由に外に出られる日

が待ち遠しいです。

みやぎアピール大行動に参加して

入間川 節子

みやぎアピール大行動が令和3年9月23日 仙台メディアテークで行われました。今年の大集会は「震災から10年 私たちのいのちと生活をどう守れるか」と言うテーマで、当事者達が、東日本大震災から10年経った心境をリレートーク形式で行われました。中には、障がい児を抱えた母親や大津波で被害を受けた石巻市からの発言者もいました。

大集会終了後、アーケード街を行進しましたが、秋分の日と言う休日にも関わらず、コロナ禍の影響で少しさみしいアピール大行動になりました。

さわやかレクリエーション みんなで『ボッチャ』を体験しよう

日 時：令和3（2021）年10月23日（土）
場 所：宮城県障害者総合体育センター



昨年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止せざるを得なかった「さわやかレクリエーション」でしたが、今年は3蜜を避けて、広い体育館で「ボッチャ」を体験することにしました。

ボッチャは、運動機能に障害を持つ人向けのスポーツとしてヨーロッパで生まれ、パラリンピックの正式種目に加えられました。今年開催された東京パラリンピックでの日本代表の活躍などで人気は急上昇しているそうです。

ルールはジャックボールと呼ばれる白いボール（目標球）に、赤、青のボールをそれぞれ6球ずつ投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに白のボールに近づけるかを競います。障害によりボールを投げることが出来なくても、滑り台のような勾配具（ランプ）を使って参加

することが出来ます。老若男女、障害のあるなしに関わらず、すべての人が一緒に楽しめるスポーツです。

さて、宮城県肢連の令和3年度「さわやかレクリエーション」は、10月23日（土）午後1時から宮城県障害者総合体育センターで「ボッチャ」を体験しました。

新型コロナウイルス感染の第5波から脱し、すべての宣言が解除されましたが、まだまだ油断できないということもあつてか、参加者は17人に止まりました。

参加者全員がボッチャは初めてということで、遠藤貴紀さんと寺澤洋さんの両スポーツ指導員からルールの説明を受け、2つのコートに分かれ、それぞれ赤、青チームで競い合いました。みんな真剣そのもので、投げるたびに「お〜うま〜い」「うわー残念」など歓声が飛び交っていました。



白のボールを狙って投げる、あるいは転がすだけなので、いたって簡単そうですが、目標球をはるかにオーバーしてアウトになったり、手加減過ぎて全然届かなかったりと四苦八苦、結構奥深い競技だと感じました。予定した2時間もあっという間に過ぎ、最後に「仙台自立の家」特製のクッキー等詰め合わせを参加賞としていただき解散しました。また機会がありましたらチャレンジしたいと思います。

遠藤さん寺澤さん、ご指導ありがとうございました。

(永井一男)

昨年は宮城県肢連では「さわやかレクリエーション事業」を実施することが出来ませんでした。コロナ禍にあり大勢での移動手段、食事処の手配等（ソーシャルディスタンスで、ギュウギュウに座れない）も難しいので、天候に左右されることがなく、尚且つ3密を避けるとして令和3年度は広い体育センター（宮城県障害者総合体育センター）で「ボッチャを体験」することにしました。

ボッチャは床の上のカーリングとも呼称されていて、東京パラリンピックの競技種目でもあり金メダルを獲得したスポーツです。参加者は例年に比べると少なかったですが、《目指せスギムライジング！》で大いに盛り上がりました。（※スギムラ

イジングとは、東京パラリンピック、ボッチャの杉村英孝選手が密集地帯にある目標球に近づけるため、その球の上に乗るようにして球を投げる難度の高い技のこと)

体験するにあたり2名のスポーツ指導員の方に教えて頂きました。2面のコートを用意してもらい、Aの赤、青、Bの赤、青と4つのグループを作りました。簡単にルールの説明を受けた後に実際にボールを持ってみると、思っていたよりもズシッと重く硬い感じがしました。試しに投げてみると力加減がわからず転がり過ぎてコートからはみ出したり、弱くすると目標点まで届かなかったりという感じでした。

いよいよゲームスタートです。白いボールを狙いを定めて投げるのですが、中々思い通りの所にかかず、投げる毎に「あ〜っ！」「キャーッ！止まって！」「惜しい！」



の叫び声が飛び交い、本当に最後の一球まで勝敗が分らない状況で、正に床の上のカーリングでした。第4エンドまでを3ゲームしてボールの投げ方が何となくわかってきました。白ボールまでの距離が明らかかな時は良いのですが、微妙な時はコンパスのような定規で測りパラリンピックで見た光景でした。経験者が2名程いてやっぱり初心者の私達よりもフォームがキマっていて上手でした。また、直接ボールを投

げなくてもスロープを使ってボールを転がすこともOKです。それも体験してもらいましたが、スロープをサポートする人はコートに背を向けプレイヤーとの声掛けは？。二人のコンビネーションがとても大事だと感じました。

ボッチャは中々する機会が無いので、機会があったらまたやってみたい！と参加者の方々に言って頂けたので大成功だったと思います。次年度も「さわやかレクリエーション事業」を企画いたしますので是非多くの方々の参加をお待ちしております。

(下山恵子)

ボッチャに参加して

私は、約6年位前からボッチャを始めました。今回は5ヶ月振りのゲームだったので、東京パラリンピックのボッチャの競技を録画していたのを見直して、イメージトレーニングをしました。

実際にボールを持ってみると、大きさはこんな感じだったかなあ？重さはもっと重かったかなあ？という感じでした。



イメージトレーニングはしていたものの、ゲームになると狙った所に投げてるつもりでも、ボールはそこに行かず四苦八苦でした。でも、少しずつカンが戻ってきました。勝ったり負けたりของเกมでしたが、

久しぶりだったのでとても楽しかったです。またやりたいです。

(岩崎 環)

さわやかレクリエーションに参加して

令和3年10月23日(土)午後1時から宮城県障害者総合体育センターで行われました。



『ボッチャ』は初めてなので、スポーツ指導員の遠藤さん、寺澤さんから『ボッチャ』のルールの説明を受けてから始まりました。2組に分かれて赤、青のチームで競技をしました。白い球に近づけるようにボールを転がすのですが、近づけるのが難しかったです。それでも白い球に少しでも近くに転がった時は嬉しかったです。

1ゲーム目は、赤い球チームが勝ちました。2ゲーム目はコートを変えて違うチームと試合をしました。久しぶりにスポーツをして、初めてのボッチャを体験してとても楽しかったです。下山さんのご主人もボランティアをしていただき参加してくれました。また、おやつの差し入れもいただき感謝です。お友達とも久しぶりに会ってお話出来たのもすごく楽しかったです。

(瀧澤麻衣子)

単位会だより

仙台地区

会長 佐藤征機

令和3年5月29日に通常総会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス拡大防止のため、5月16日に通常総会を中止することに決めました。会員各位には、書面決議の通知を送付いたしました。会員各位殿から1通も通知は来ませんでした。自立の家の感謝祭についても同様に中止となりました。

宮肢連関係の行事は、全国大会は開催されましたがオンラインでの出席となりました。東北大会は中止になりました。通常総会は、令和3年6月19日を予定していましたが、新型コロナウイルス拡大防止のため令和3年9月25日まで延期をしていましたが、中止となりました。

さわやかレクリエーションについては、令和3年10月23日（土）宮城県障害者総合体育センターでボッチャを実施しました。

東北ブロック地域指導者育成セミナーについては、昨年度は新型コロナウイルス拡大防止のため宮城県が当番県でしたが中止いたしました。今年度も中止と考えていましたが、全肢連からの要請で令和3年12月18日（土）～19日（日）の2日間開催されました。冬の時期ともあって18日は北海道では大雪で飛行機が欠航、東北道も通行止めが相次ぎ、車での参加者は何時間もかかったそうです。講師の大垣先生は仙台まで来るのに大変時間がかかってしまい、その間は全肢連の清水会長がピンチヒッターとして活躍していただきました。

19日は4班に分かれてグループ討議が行われ、各班からの質疑応答で盛会に終了しました。

新型コロナウイルス異変株の感染拡大は、予断を許さない情報が継続していますので、会員の皆様お体を大切に1日も早くコロナウイルスの収束を願いつつ、また元気でお会いしたいです。

東部地区

会長 赤間邦夫

令和3年度第33回・東部地区総会を開催することができませんでした。特に、東部地区内新型コロナウイルス感染拡大が続き、当面の対策で役員会を自粛し、開催時期、開催方法等模索していましたが、実施することができませんでした。会員の皆様には大変申し訳ありませんでした。次年度は、是非開催したいと考えておりますのでご理解いただきますようお願いいたします。

会員の皆様の声は、障害のある子の「親亡き後」の不安と自活できる施設とグループホームの要望です。親や家族の介護で悩み、障害者自身の高齢化で多くの問題があります。東部地区は交流を大事に、会員の皆様と一緒に支え合いながら活動を続けていきます。

新型コロナウイルス感染拡大が早く終息して普段の生活に早くもどりたいたいです。今後とも会員皆様のご支援とご協力を宜しく願います。

仙北地区

会長 川名敏也

昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため会合や行事等の活動ができませんでした。

会としては、重度対応型グループホームを開設にしてほしいという思いを関係機関や関係団体と話し合いの場を持ちました。内容としては重度者に対応するためには施設の設備を充実しなくてはならないので国が施設整備費の補助金の増額が必要である。世話人、生活支援員の配置基準についても課題として意見がでました。世話人、生活支援員のオーバーした分は利用者かGH事業者が負担しなければならないので難しいのが現状であるとのことでした。

障害者が地域で生活を営むためにはGHが重要と考えます。今後も地域にGHが増えるように活動していきたいと思っております。

特別寄稿：親の目 子の目

障害者支援施設

啓生園施設長

吉川 真一

仙台の桜が開花宣言となった翌日、私は白鳥の北帰行とともに実家のある秋田に向かいました。

理由は、父親の手術後の対応について、病院関係者との面談が必要だったことです。一人っ子の私は、両親の愛情を全身に受けて育ちましたが、頑固な父親の年々老いていく姿を受け止めながらも、今後の生活を想像する間もないまま、「好きに暮らしてほしい」と安易に考えていました。

関係職員との面談内容は次のようなものでした。「手術は成功しました。これから退院にむけてリハビリを行います。」とここまでは順調でしたが、「自宅での介護が大変になった場合は？」「介護者の母親が倒れた場合は？」「介護申請の準備は？」「年金の管理は？」「市役所への届出や各種の支払いは？」「将来のための後見人は？」……。

こんなやり取りをしていて、ふと「どこかで同じことをしたな。」と思い出しました。昨年、啓生園では高齢の入居者が心不全で亡くなりました。あっという間に体調が崩れ、あっという間に天国に召されました。悲しむ時間もないままです。

その利用者さんは、両親が幼いころに亡くなり、知人宅に住込みで働き、戦後を一人で生きてきた苦労人でもあります。ご本人は、普段から几帳面で気丈な方です。財産の管理も自分で行い、病院の受診も単独で行きます。なるべく他人に負担をかけたくないと強く思っている方でもありました。

逆にみれば、財産や身辺についてよくわからない状況でした。

そんな利用者さんが、突然体調を崩したため、本人も様々なことを短時間で考える必要に迫られました。「もしも、自分が死んだら？」「お墓のこと」「土地のこと」「通帳や財産のこと」など、誰も頼る人がいませんでした。

当時、相談した成年後見人の方は、「本人の意識がしっかりしている以上、成年後見人の認定にされない。むしろ、“任意後見人”が必要で、その契約の主な業務内容は、“死後事務”です」と、なんだ“任意って？”その契約料を聞いて、これまた驚いた記憶があります。

このように、両親の将来や生活環境について、私はなるべく早く結論を出す必要が出てきましたが、会員の皆様にはどう感じましたか。

他人ごとのように思っていたことが、突然身近に直面したとき、人は慌てて冷静に考えることができなくなるものなのですね。

会員の皆様は、将来に備えて既に準備ができているのであれば幸いです。

長年、愛情をもって育ててくれた家族に対して、安心して今後を過ごせる環境が整えられるように、親孝行をしなければと切に思うばかりです。

会長日誌

仙台市肢体不自由児者父母の会

会長 佐藤征機

今年も役員さんにいろいろとご協力をいただきまして有難うございました。

令和3年5月29日に通常総会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス拡大防止のため、令和3年5月16日に通常総会を中止することと決めました。会員各位には、書面決議の通知を送付いたしましたが、会員各位殿から1通も通知は来ませんでした。自立の家の感謝祭についても同様に中止となりました。

恒例の仙台市健康福祉部障害企画課、支援課との打ち合わせについても令和3年度は中止することにしました。

令和3年12月に新型コロナウイルスの異変株が国内に初めて報告されて、全国に広がり始めています。この異変株の感染拡大は予断を許さない状況が継続していますので、会員の皆様お体を大切に、1日も早くコロナウイルスの収束を願いつつまたお元気でお会いしたいです。



宮城県肢体不自由児者父母の会連合会

会長 永井一男

コロナ禍3年目、いまだ収束せず ～日常生活いつ取り戻せるのか～

国内で初めて新型コロナウイルス感染者が確認されたのは、2020年1月15日でした。宮城県内では同



年2月29日に初の感染者が確認されました。すでに3年目に入りました。新型コロナウイルスはアルファ株からベータ株、ガンマ株、デルタ株、オミクロン株と変異しながら、第6波にわたって猛威を繰り返しています。

2021年2月やっとワクチン接種が始まり、国民の多くが2回目の接種を終えた11月頃から新規感染者は急激に減少し、第5波からの脱却が見られました。宮城県内でも新規感染者がゼロの日が続きました。誰もがこれでコロナ禍は収束し、日常生活が取り戻せると思ったのではないのでしょうか。ところが、11月末に南アフリカ由来のオミクロン株が国内で初めて確認され、年明け以降はオミクロン株のこれまでにない感染力の強さで、感染者は急拡大し、第6波を引き起こしました。オミクロン株による感染者は、10歳以下の幼児・児童など比較的若年層に多いことから、ワクチン接種は12歳以上から5歳以上に拡大されました。また、3回目のワクチン接種も1日100万回を目指して推進しています。しかし、ワクチン接種は思うように進まず、第6波は長引きそうです。また、オミクロン株より感染力が強いと言われる、オミクロン株の派生型「BA-2」

が確認されています。さらに、ブラジルでは新たな変異株「デルタクロン株」の感染が見つまっているなど、第7波につながる恐れがあると言います。新型コロナウイルス禍は収まりそうにありません。

ロシア、ウクライナに侵攻 ～生活物資軒並み高騰～

世界中がコロナ禍であえいでいる中、2月には「ロシアがウクライナ侵攻」のニュースが舞い込んで来ました。ロシアがウクライナ東部の親ロシア派支配地域の住民を保護することを口実に軍事介入し、軍事施設のみならず民間施設にもミサイル攻撃をしています。これに対して、米国など先進7か国や欧州連合（EU）などは、ロシアへの経済制裁で対抗しています。

その結果、グローバル化した世界経済は、大きな影響を受け原油や穀物などが高騰しています。日本国内でも、ガソリンや小麦、木材、水産物など軒並み高騰し、日常生活を圧迫しています。ロシアの暴走を一刻も早く食い止め、秩序ある平和な世界を取り戻したいものです。

1年遅れの東京オリパラ ～多くのドラマに感動と希望～

「2020東京五輪」は、1年延期され2021年7月23日に開幕しました。新型コロナウイルス感染症が世界中で収束の兆しが見えない中での開催で、アスリートを除く関係者などの来日は大幅に制限され、各種競技はほぼ無観客での大会となるなど、異例づくめの大会となりました。

そんな中、日本選手団の活躍は多くの感動と希望を与えてくれました。悲願の金メダルを獲得した野球は、1984年ロサンゼルス大会以来でした。男子体操では橋本大樹選手が総合で金メダル。伊藤美誠と水谷隼選手が卓球混合ダブルスで金メダル。

13歳の西矢栞選手は、東京五輪初種目のスケートボード女子で、最年少での金メダルを獲得するなど、金メダル27個、総メダル数は過去最多の58個を獲得しました。

パラリンピックは、8月25日から開催されました。パラリンピックでも日本選手団の活躍が目立ちました。車いすテニスで国枝慎吾選手が金メダル、競泳男子100mバタフライ視覚障害クラスで木村敬一選手が金メダル、女子マラソンでは道下美里選手が金メダル、七十七銀行の鈴木亜矢子選手はバドミントンシングルスで銀、ダブルスで銅メダルを獲得しました。ボッチャでは杉村英孝選手が日本で初めての金メダル、団体では銀メダルを獲得しました。「スギムライジング」が流行語となるなど、ボッチャは大人気となりました。日本選手団の金メダルは13個、総メダル数は51個と過去2番目のメダル数でした。

北京冬季五輪も東京五輪と同年度内開催 ～多くの課題も～

北京冬季五輪は2022年2月4日に開幕しました。東京五輪が1年延期されたため、冬季五輪は、同年度内の開催となりました。北京大会は、厳戒態勢の中、91か国・地域から約2,900人の選手が参加しました。日本は124人の選手を派遣しました。冬季五輪でも日本選手団の活躍は目を見張るものでした。スピードスケート女子の高木美帆選手は、金メダル1個と銀メダル3個を獲得しました。スキージャンプ男子の小林陵侑選手は金と銀メダルを、スノーボード男子ハーフパイプで平野歩夢選手が金メダル、女子ビックエアでは17歳の村瀬心栞選手が金メダルに輝きました。カーリング女子ロコ・ソラーレの活躍も見事でした。前回の平昌大会では銅メダルでしたが、2度目の今回は決勝進出

で金メダルは逃したものの、多くのドラマを残して銀メダルに輝きました。

北京冬季パラリンピックは、3月4日に開幕しました。ロシアのウクライナ侵攻で、ロシアとベラルーシが参加を除外され、世界46か国・地域から約560人が参加、6競技78種目で競い合いました。日本は29選手が出場しました。

アルペンスキー大回転女子座位に出場した村岡桃佳選手は、アルペンスキー滑降と共に金メダル2冠に輝きました。村岡選手はアルペンスキースーパー複合でも銀メダルを獲得しました。森井大樹選手はアルペンスキー大回転男子座位とアルペンスキー滑降の2種目で銅メダル、ノルディックスキー距離の男子20kmクラシカル立位で川除大輝選手が金メダルを獲得しました。

10日間にわたる冬季パラリンピックで日本は、1998年長野大会に次いで多い、金メダル4個を含む総メダル数7個を獲得しました。

2月から始まったロシアのウクライナ侵攻を受ける中で、ウクライナの選手団は29個のメダルを獲得し、中国に次ぐ2位となる活躍を見せました。

北京冬季オリパラは、課題の多い大会でもありました。採点の曖昧さから判定の問題が数多く見られました。女子フィギュアスケート選手のドーピング問題もありました。また、米国や英国などの外交ボイコットがありました。

ロシアのウクライナ侵攻で、パラリンピックの開幕直前にロシアとベラルーシが除外されると言う、残念な大会でもありました。

深夜の震度6強 「またか!」 ～東日本大震災が蘇る～

東日本大震災から11年が過ぎました。

昨年は10年の節目で、各地で鎮魂のイベントが開かれましたが、今年は、式典に代えて献花だけとする自治体が多くなりました。それでも、命日の3月11日には、太平洋に向かって手を合わせる、多くの人たちの姿がありました。

1月15日南太平洋・トンガ沖で海底火山が噴火し、津波が発生しました。翌日、日本の太平洋沿岸にも津波警報が発表され、避難指示が出されました。しかし、沿岸12市町村で避難した人は僅か4.7%だったそうです。東日本大震災で身をもって体験しているにもかかわらず、危機感が薄れてしまったのでしょうか。

政府は、昨年12月に日本海溝・千島海溝でマグニチュード9の地震が起きた時の、東北の太平洋沿岸部で最大19万9,000人の死者が出ると想定し、公表しました。しかし、すべての人がすぐ逃げれば、犠牲者は大幅に減らせるとし、避難の重要性を訴えています。

3月15日深夜の11時36分頃、宮城県と福島県で震度6強の大地震がありました。震源地は福島沖、深さ約60km、マグニチュード7.3と推定され、津波注意報とともに、両県の沿岸部に避難指示も発令されました。この地震によって、死者3名のほか多数のケガ人が出ました。また、東北新幹線が白石市内で脱線したほか、家屋の損壊や断水などの被害が発生しました。幸い津波は小さく、福島原発や女川原発には大きな被害はありませんでしたが、11年前の大震災が否応なく蘇りました。

令和3年度宮城県肢連の活動 ～2年連続コロナ禍に翻弄されて～

当県肢連の通常総会は、例年6月に開催していますが、令和3年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、9月まで延期してコロナ禍の推移を見た上で開催する

ことにしました。しかし、コロナ禍は一向に収まる気配がなく、対面での総会は感染拡大防止を最優先にし、10月に書面による決議としました。

通常総会は、昨年続く2度目の書面決議となりました。また、全肢連の通常総会も書面決議となりました。

東北肢連・第40回秋田大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。

全肢連・第54回全国大会東京大会は、令和3年9月18日(土)に東京都大田区・産業プラザP i oで開催されました。全国大会もコロナ禍を考慮し、会場参加者を制限するとともに、オンライン参加も併用して開かれました。宮城県肢連は、会場参加は避けてオンライン参加しました。

さわやかレクリエーションは、これまでバスでの小旅行を楽しんできましたが、「密」を避けて、パラリンピックで一躍人気となった「ボッチャ」を体験しました。

地域指導者育成セミナーは、宮城県肢連

が当番でした。当初、昨年に引き続き中止の考えを全肢連に伝えていましたが、全肢連から「昨年も中止しているのに、今年は時期を遅らせるとか、規模を縮小あるいはオンラインなど、開催を前提に検討してほしい」との強い要請を受け、年末押し迫る12月18日と19日の2日間の日程で、宮城県青年会館を会場に開催しました。東北各県から19人が参加しました。

このほか、恒例の「仙台自立の家・感謝祭」など昨年に続き中止となったほか、役員会もほとんど開かれませんでした。

コロナ禍は3年目に入りましたが、収束の兆しは見えません。令和4年度の事業・活動も以前のように実施することが出来るのか、不透明ではありますが、出来る限りの方法を検討しながら、取り組んで参りたいと考えています。

(この日誌は3月末日で記したものです。コロナ禍など状況が変化している場合があることをご了承ください)

「宮城県障害者社会参加推進協議会」に参加して

永井 一男

宮城県障がい者福祉協会の森正義会長からご案内いただき、令和4年1月28日(金)、宮城県障害者社会参加推進協議会に初めて参加させてもらいました。

令和3年度第2回の協議会は、オンライン参加者7人を含む20人が参加して開催されました。

森正義協議会会長と宮城県保健福祉部障害福祉課の鎌田明彦氏の挨拶に続き、東北大学大学院法学研究科、公共政策大学院教授の御手洗潤氏を講師に、「パラリンピックのレガシーを活用した共生社会の実

現」について学びました。

御手洗氏は、「2020東京オリパラ」を振り返り、オリンピックで1984年ロサンゼルス大会以来の金メダルを獲得した日本野球や男子体操の総合で金メダルを獲得した橋本大樹選手、卓球混合ダブルスで日本初の金メダルを獲得した伊藤美誠と水谷隼選手、新競技のスケートボード女子で13歳の西矢栳選手が日本人最年少の金メダルを獲得したことなどで、日本選手団の金メダル数が27個、総メダル数58個と過去最多だったこと。パラリンピ

ックでは、車いすテニスで国枝慎吾選手が2大会ぶりに3度目の金メダルを獲得、100m背泳ぎで山田美幸選手（14歳）が最年少の銀メダル獲得。競泳男子100mバタフライ視覚障害クラスで木村敬一選手が金メダル、陸上女子マラソンの視覚障害クラスで道下美里選手が金メダル、バドミントン女子では地元七十七銀行の鈴木亜弥子選手がシングルスで銀、ダブルスで銅メダル、ボッチャでは杉村英孝選手が日本史上初の金メダル、団体では銀メダルを獲得、「スギムラジング」が2021年流行語大賞に入ったことなどを上げ、全体では金メダル数13個を含む51個のメダルを獲得、アテネ大会に次ぐ多さだったと称賛しました。

その上で、障害のある選手たちが見せるパラリンピックは、共生社会の実現に向け人々の心のあり方を変える絶好の機会だとしました。

東京オリパラは、コロナウイルス感染症による世界パンデミックの影響で1年延期して開催されたこと、コロナ対策でほとんどの競技が無観客で開催となったことなどにも触れました。

東京五輪を契機にユニバーサルデザインの街づくりや心のバリアフリーを推進するため、2016年2月関係府省等連絡会議を設置し、障害者団体等の参加を得て施策を検討した。その結果、「心のバリアフリー」では、①子供たちに「心のバリアフリー」を指導する。②接遇を行う業界（観光、交通、外食等）に全国共通の接遇マニュアルの策定と普及。③困っている障害者などに自然に声を掛けることが出来る国民文化の醸成。「ユニバーサルデザインの街づくり」については、①交通バリアフリー基準・ガイドライン改正。②ホテル等建

築に係る設計標準の改正。③バリアフリー法の改正―――に向け取り組むことにした。そして、東京五輪ではオリパラの組織委員会を一つにし、ユニフォームの統一なども図られた。

自治体の取り組みとしては、ホストタウンに登録した数は462件に上り、コロナ禍にもかかわらず、五輪参加国・地域の事前合宿や事後交流を実施した。とし、学校などでの交流の例を動画で紹介しました。

最後に、共生社会の実現に向けて一人一人ができることを行うことが大事だとし、直接できることは、①声掛け。②優先駐車場に駐車しない。③点字ブロックに物を置かない等。意識を変えるためにできることは、①パラスポーツ体験。②心のバリアフリー研修。③障がい体験。④街歩き等を実践してほしいと訴えました。

東京五輪後に、大阪や京都を中心に多くの地域で、街歩きをしながらちょっとした広場でボッチャを体験している様子をスライドで紹介し、これらを通じ意識を変えることが大事だ。と結びました。

私たちは、今年の「さわやかレクリエーション」で、初めて「ボッチャ」を体験しました。それも、パラリンピックで杉村選手等の活躍があつて一躍人気が出た結果かもしれません。

どんな障害があつても、高齢者であっても、「ボッチャ」に限らず「モルック」等一緒にできるスポーツはまだまだありそうです。スポーツを通じてお互いを理解し、結果として共生社会が実現できるのではないのでしょうか。

有意義な会議に参加させていただきましたことに感謝申し上げます。